漱石、前期・後期三部作を読む

文芸の哲学的基礎

漱石は朝日新聞社に入社にあたって、自分のよって立つ基礎的な考えを表明している。それが「文芸の哲学的基礎」に描かれている。

大変長い評論で、人間の生の根源に「意識」を置き、そこから存在を意識する「我」と意識される「物」との関係に及ぶ。

「意識の連続」は「生命」と言う観念を生む。そこで重要なのは「生命」が「真」・「善」・「美」・「壮」の 4 理想のうち、何を選ぶかによって方向性が決まることである。

文学作品の内容は、上記の 4 種類の理想が、「知」「情」「意」の 3 作用との関連でどのような性質になるかが決まっていく。

「文芸」とは作家が自分の「理想」を「技巧」によって表したものである。

ごく簡単に要約すれば、以上が漱石の文学に対する基本的姿勢であり、「虞美人草」の甲野は「真」を求める「知」の人、

藤尾は「美」を尊ぶ「情」の人、

宗近は「善」と「意」の人、と言うことになろうか。

だが、「虞美人草」に続いて漱石の連載する「抗夫」は重きががらりと変わった作品である。

「坑夫」は、新井伴男なる人物が突然訪問して来て、自分の坑夫体験を小説にしてほしいと言うので、漱石はその要点を詳しく書き止めた。

漱石が青年のその場その場の心理を説明させ、生と死の境、あるいは投げやりの声から「働く」ことの意味を取り戻す経過を読者に示した小説である。

彼が語るのは自分の「過去」であり、漱石が会ったときは 19 歳なのである。

したがって、彼は山を降りてすぐに夏目家に現れ、書生として住み込んだことにならざるを得ない。

作中の「自分」が言う「自分の心の終始動いているのも知らずに、動かないもんだ、変わらないもんだ、変わっちゃあ大変だ」と思う人々への批判も、「昔の自分」を「遠慮なく厳密。解剖の刀を振って、縦横十文字に自分の心諸を切り裂いなんで見る」のも、漱石の創り出した現在の「自分」なのである。

漱石の言葉で言えば、「時間」と「空間」の差による小説世界の構築である。

ここに多少の誤差があるけれども、この「小説」は、漱石が人間の心理の深みに入り、状況によって様々に変わる人間を描くことになる第一歩であった。

三四郎の他者認識

三四郎が上京してから学んだものは、ほとんどすべて、人から教えられたものである。
漱石は「三四郎」予告で「田舎の高等学校を卒業して東京の大学に入った三四郎が新しい空気に触れる。
そうした同僚だの先輩だの若い女だのに接触して、いろいろに動いていく、(作者の)手間はこの空気のうちに、これらの人間を放つだけである」と言う。
この小説はその通りに展開していくが、東京に無知な三四郎は、出会う人物の言葉をそのまま信じてしまう傾向が強い。
与次郎、野々宮兄妹、広田、そして美禰子。美禰子は「ストレイ・シープ」とか「われは我が咎を知る。わが罪は常に我が前にあり」のように、聖書の言葉を機に応じて口にする才女である。おそらくこれらの語句は、自分の自覚する姿や、弄ぶ気はなくとも三四郎を弄ぶ結果になったことへの謝罪である。
だがそれをすら、こういう美辞麗句で表現してしまうところに、西洋文明の風潮に染まりつつ、どこか借り物的な感じがする女性としての美禰子がいる。
「森の女」と名付けられた美禰子の画像の前で、与次郎に絵の出来を問われた三四郎は、「森の女」と言う「題」が悪いといい、ただ口の内で迷羊、ストレイ・シープ、迷羊、ストレイ・シープと繰り返した。彼は「森の女」よりも、「迷羊」としての美禰子を悟ったのである。
これ以降、漱石の連載小説は、男女の微妙な食い違いを中心として展開することになる。

「それから」の行方

「それから」は(明治 42 年 6 月 27 日から 10 月 14 日)は、予告文に漱石が「三四郎」のそれから先を書いたと言う説明によって、次作の「門」とともに連作と見なされている。
確かに主人公代助の年頃や、好きな女性が他の男性と結婚したと言う点では「三四郎」と「それから」には共通点があるものの、当の人物たちとその環境は、あまりにも違いすぎる。
第一、 代助は次男で、父又は兄の金で一人優雅な趣味を楽しむ暮らしぶりである。
三千代は両親が世を去った点で美禰子と似ているが、頼りにした兄も死んでいる。彼女は代助と結婚するものと思っていたらしいが、代助は妙な友情心から平岡と三千代を結びつけた。
平岡は銀行員で、西日本を転々とした上、支店長の公金横領に絡み、辞職して東京に帰ってきた。
代助とは 3 年ぶりの再会である。だが 2 人は以前のように快活に喋ることができない。

代助は父に呼びつけられて家に帰ったが、相変わらずのお説教で、息子の「軌道を支配する権利」があるかのように、「少しは人の為に」なるようなことをしなければいけないと注意した。

父には蓄財の能力があり、幕末に困窮した藩の財政を回復したことがある。今は長男に権利を譲っているが、維新後、実業に転じて成功した。父の信念は「誠実と熱心」である。

代助は今のように時代遅れな、と内心思いながら、表向きは黙ってご意見を伺っている。彼は父が持ち込む縁談を全てのらりくらりと逃げ、30 になってもまだ独身で、金は父からもらい、音楽会や芝居見物などの趣味を楽しむ結構な身分である。彼は、「食う為に働らく」ことを拒否し、「生活以上の働き」をしたいからだと平岡に明言している。

漱石は明治 45 年 8 月、明石での講演「道楽と職業」で、「科学者哲学者もしくは芸術家」でもない限り、「人のためにする」のが職業で、「人の為に」働くことが結果として金銭になり、生活を支えることになると言っている。

その意味では、代助が「働く」場所は無償の奉仕とか、「禅僧の修行」のような道楽しかないことにある。代助が平岡と「働く」ことについて議論した時、代助は「衣食に不自由のない人が、いわば、物数奇にやる働きでなくちゃぁ、真面目な仕事はできるものじゃない」と断言し、平岡から「君のような身分のものでなくちゃぁ、神聖の労力は出来ない訳だ。じゃぁますますやる義務がある」と言い返され、三千代もそれに賛同する。金に困った平岡は、三千代を代助のもとにやって金を借りさせる。だが自分の金を持たない彼は、兄嫁の梅子に借金を申し入れて、結果的にはその半額にも足りない金を三千代に渡すことしかできないのである。彼は当時の日本には珍しい「特殊人」として設定されている。抽象的論理には優れ、具体的な生活問題には無頓着な人物である。だが彼にとって、その意味で「愛」は「金」よりはるかに大切である。

甦る過去

代助は学生時代、三千代と兄の菅沼と 3 人で楽しんでいた時代を思い出した。平岡がそれに参加して「三千代と懇意」になった。この関係は「心」の三角関係と一脈通ずる面がある。

この 4 人の関係が崩れるのは、菅沼の母が上京してチフスにかかって死亡、菅沼もそれに伝染して死んでしまったからである。三千代は近県の実家の父に引き取られた。平岡が三千代との結婚を望んだ時、代助は実家まで足を運び、父及び三千代の同意を取り付けたのである。父は株に失敗して北海道に移住してしまった。三千代は代助が進めるので平岡と結婚したのである。

代助は自分の頭脳の働きを誇りに思う人物である。だが三千代と再会して以来、彼は自分の心が三千代に吸い寄せられていくのを制止できなかった。彼は「二人の過去を順次にさかのぼってみて、いずれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見いださない事はなかった」。彼は三千代のために金を工面して渡した。彼の観測では、平岡の妻に対する態度は、

彼らが帰郷した時すでに変質していた。夫婦の距離が、自分と言う「第三者」のために広がったとは「自己の悟性に訴えて」信じることができなかった。夫婦の心が離れつつある原因として、彼が想定したのは

1、三代の病気と肉体上の関係、

2、子供の死亡、

3、平岡の遊蕩、

4、会社員としての平岡の失敗、後に平岡の放埒に基づく経済事情であり、それらを勘案して、代助はこの夫婦はもともと結婚すべからざる相手だったのだと結論した。

代助は三千代への気持ちは「自然の愛」だと自覚している。だが彼女は平岡の妻である以上、それを表に出そうとはしていない。彼は新聞社に入った平岡に対して、なるべく早く帰って「三千代さんに安慰を与えてやれ」と言ったり、謀られたとは言え、佐川の娘とお見合いをしたり、赤坂の芸者と一夜を過ごしたりもしているのである。「大地は自然に続いているけれども、その上に家を建てたら、断ち切れ切れになってしまった。家の中にいる人間もまた切れ毛になってしまった。文明は我等をして孤立せしめるものだ「(8-6)と、かつて彼は考えたことがある。その時彼は平岡との不仲を予感していた。だが平岡が「家」を持ったのは三千代と結婚したからであり、代助のように気ままに暮らすためではない。代助は自分が三千代の心を動かしたために、平岡が妻から離れていくとは思うことができないが、「同時に代助の三千代に対する愛情は、この夫婦の現在の関係を、必須条件として募りつつあることもまた一方では否みきれなかった」。

他の作と同様に、ここでも代助の心の両方向性が指摘されているわけである。彼はすべての人間関係において、常に相手の意思に沿って当たり障りのない態度に終始し、内心では体を軽く見て生きていた。彼は「感激」とか「熟成」とか「純粋」とか言う言葉の裏にある「虚偽」を知っているつもりであった。父の場合が特にそうである。

代助の破綻

代助はついに三千代に愛を告白した。彼は梅雨空の中、三千代が思い出せてくれた白百合の花を買いに行き、部屋に飾った。その香りに「再現の昔」を思い、いつにない安らぎを感じた。そこには「慾得」も「利害」も「自己を圧迫する道徳」もなかった。「雲のような自由と水の如き自然とがあった」。だがこの夢のような気分は、次に来る「永久の苦痛」に消された。

雨に降り込められる中で、代助と三千代は世間から隔絶されたように 2 人で話をした。彼は「僕の存在にはあなたが必要だ。どうしても必要だ」と言い、三千代は泣いた。彼女はなかなか返事をしなかったが、不安や苦痛の泣き顔をつけた後、「しようがない。覚悟を決めましょう」と答えた。世俗的な条件を一切無視して、ただ男と女の愛だけがあるこの場面は、緊張に満ち美しい。三千代は漱石が創造した女性像の中で、最も意に適った女性であろう。気取りも偏見もなく、もちろん金銭欲や世間の目も気にしない。「自然」のまま

振る舞う女性である。
　この後結末は記すまでもなく、平岡は「三千代をくれ」と頼む代助に「うん、やろう」と答えるが、三千代が病気で寝付いたから、治ったらやると言った。彼は絶交を宣言して詫び、代助の父にことの顛末を手紙で知らせた。父の代理で兄が来て、同じく絶縁を言い渡して帰る。孤立無縁の代助は重症だと言う三千代を案じて平岡の家の辺をうろ着くが、自体は何も変わらない。
　小説の初めに、父と平岡から来た 2 通の手紙が提示されるが、物語はそれを契機として展開し、その 2 人から縁を絶たれて終わる。
　その代わりに、代助は三千代の心を取り戻した。どんな犠牲を払っても彼女を得たいと願った彼の恋愛は、当時流行し始めていた恋愛至上主義と呼んでもいいが、その一方で生活のための金銭の問題も同時に浮上する。それでも恋愛を選んだ彼は、これまでの主張を捨てて、金を得るための職を探しに出かけなければならない。電車に乗った代助には彼の嫌いな「赤い」ものばかりが目につき、郵便ポストや赤い風船や売り出し中の赤旗や赤ペンキの看板などは、頭の中で炎のように回転しながら盛り上がった。彼は「自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗って行こう」と決心した。その後の 2 人の運命は不明である。

閉ざされた門

　「門」(明治 43 年 3 月 1 日から 6 月 12 日)がこれまでの漱石作品と違うのは、現在、宗助・御米夫婦が、崖下の借家にひっそりと暮らしていることである。
　二人には口に出せない過去があった。宗助は京都の学生時代、安井と親しく交わった。
　安井はある時(おそらく大学 2 年になる夏休み)横浜へ行き、若い女を連れて帰り、「妹だ」
　と紹介した。それが御米である。宗助は次第に彼女ともなじみ、3 人でよく遊んだ。
「事は冬の下から春が頭を擡げる時分に始まって、散り尽くした桜の花が若葉に色を変える頃に終わった」。
「大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである」。「彼らは砂だらけになった自分たちを認めた。けれどもいつ吹き倒されたかを知らなかった」
　これらの引用分(14 の 10)は、宗助の回想として抽象的な形容で記されているが、要するに宗助と御米は、それと自覚しないままに「恋」に落ち、気がついたときには抜き差しならぬ関係に陥っていたわけである。
　それが爆露した結果、二人はすべての関係から断ち切られ、どこまでも「歩調を共にしなければならないこと」になった。御米が安井の妹では無いことを薄々知りながら、姦淫の罪を犯した自分を、彼は世間の指弾通りに受けとめたのである。
　二人は広島、福岡と流れ歩き、やっと東京に戻ってきたが、口には出さないもののその前歴を忘れた事は無い。

宗助の今の職業は下級管理で月給は「23 円以下」である(全集、43 年 3 月 28 日「俸給令改正」)。漱石の非常勤講師料 1 ヵ月分より安い。彼は廃嫡は免れたから、父が死んだときその財産を受け継ぐ権利があったはずだが、叔父の佐伯はその遺産を整理してくれた後、急死してしまった。

叔母の話では、邸宅を売り払い宗助に渡した 2 千円(ただし 1 千円は弟小六の学費として預かる)以外に 4 千数百円が残ったそうだが、叔父は神田の表通りに家を建て、小六の財産にしようとした目算が狂って、新築の家は火事で焼けてしまったと言う。「心」の「先生」は父の死後、父の実弟である叔父に不信感を持ち、友人に家財を売ってもらったため難を逃れ、働かない生活をしているが、宗助は財産の土地全てを叔父に任せたために、貧乏暮らしをせざるを得ないのである。

宗助が叔父の死後受け取ったのは、「抱一」と落款のある屏風だけであった。

大家の酒井

この屏風が縁で宗助は崖上に住む大家の坂井と親しくなる。

漱石得意の、ふとしたことが縁で人と人を結びつける展開である。

宗助は坂井家に入った泥棒が崖から投げた手文庫を持っていき、そのゆったりとした人柄を知った。彼は 35 円まで釣り上げて売った屏風が 80 円で坂井の手に渡ったことを知って驚くが、寮を出る小六が同居することになれば、売れそうな金目のものは屏風しかなかったのである。

御米は結婚以来、病気がちで床に臥せることがある。彼女は転居のたびに妊娠したが、いつでも失敗した。易者は、あなたは子供ができないと宣告し、彼女を失望の淵に落とすが、彼女は健気に振る舞う。同居することになった義弟の小六ともうまく付き合えるようになり、宗助は時々坂井の許へ話に行き、貧しくとも平穏な生活が続くように見えたが運命はそう簡単に二人を許しはしなかった。

暮れになり人並みに新年を迎えるために、彼は床屋に行った。彼は「ぼんやりとした懸念」を心に抱いたまま床屋の「冷たい鏡のうちに、自分の影を見出したとき、ふとこの影は本来何者だろうと眺めた」。平凡な生活には似合わない疑問である。その帰り道、彼は坂井家に立ち寄った。そこには相変わらず陽気な笑い声に充ちていたが、「一人妙な男が」混じっていた。甲斐の国から反物を背負って売り歩く織屋である。宗助は主人の坂井に勧められて御米のために銘仙の反物を三円で買ったが、家に帰る間、気がかりだったのは、織屋の「油気のない怖い髪の毛がどういうわけか、頭の真ん中で立派に左右に分けられている様」だった。「何言う訳か」と言う表現に、彼が避けてきた記憶の甦りが込められている。前述した彼の過去の回想に、安井は「髪の毛をなくして真ん中から分ける癖があった」と記されている。

運不運はいつもと隣り合わせである。正月 7 日に、宗助の経済状態を察していた坂井は宗助及び、書生が兵役にとられていなくなったので、小六に書生に来ないか、と申し出て

くれた。ありがたくそれを受けた宗助は、その代わりに主人の弟が学生時分から手を焼かせ、今はもう家にいて、妙な仕事をしている「冒険者」だと言う話を聞かされた。今東京に帰って、蒙古王の一人に貸すために 2 万円の借金を申し込んできた。明後日の夜来るから一緒に会ってみないか、と誘われたのである。

弟さん一人かと聞くと、弟の友達で安井とか言う男が一緒だと言うので、宗助は「青い顔をして坂井の門を出た」。

蒙古はいくつもの王家に分かれていたが、特にカラチン王は親日家で、北京警務学堂(警察学校)の川島難波は日本の蒙古進出を考え、カラチン王と視察のために日本へ行き、「日本の事業家とこの王様をどう組み合わせて蒙古への事業を伸ばして一仕事を起こしてみる考えを二葉亭に漏らし、成功したら君はそちらを担当してほしいと言ったと言う(二葉亭四迷選集)。カラチン王は明治 36 年来日し、同年末、河田操子が同王室の教育係として赴任した。「門」の作中年代の下限を管理増俸の件から 43 年春とすれば、もうこの「冒険者」は、さらに増えていたはずである。

禅修行

安井の名を聞いて以来、宗助は不安に押しつぶされそうな日々を過ごした。役所の仕事も手につかず、安井が来ると言う当日は、牛鍋店で酒を飲んで遅く帰った。彼は安井の件を御米にも話さず一人苦しんだ。「天が波を売って」伸び縮みし、「地球が糸で吊るした鞠のごとく大きな跨線を描いて空間に動く」「魔の支配する夢」を見た。坂井はその後何も言ってこなかったが、彼はこれまでの「忍耐」の生活から「積極的に人生観を作り変えなければならないと決心し「心の実質」を太くするために座禅を学ぼうと決心した。

同僚の知人から紹介状をもらい、役所を病気欠勤して、彼は鎌倉で 10 日ほど禅修行にはげんだ。

おそらく漱石が明治 27 年末から 28 年初めにかけて体験した、鎌倉円覚寺での禅の修行がそのまま適用されているが、法案として出された「父母未生以前本来の面目」とは何か、と言う題さえ同じである。前述したようにこれは漱石が参禅以来、いつも念頭から離れなかった難問である。当然、宗助の答えも老師から一喝され、虚しく帰宅せざるを得なかった。

帰宅後の宗助の生活は、表面上、以前と何も変わらない。御米はもちろん、坂井も小六も同様である。安井は何事も知らずに蒙古に帰り、役所は「みんなから病気はどうだと聞かれた」。

今回の「雨雲」はかろうじて頭に触れずに通り過ぎたが、「これに似た不安」は、これからも繰り返されるだろうと言う「虫の知らせ」が宗助にはあった。「それを繰り返させるのは、天のことであった。

それを逃げて回るのは宗助のことであった」と記す漱石には「天意」のままに動かされる人間の姿が、無力な哀れむべきものと見えていた。「それから」の代助は「天意に従う代

わりに、自己の意志」に準ずる(三千代をあきらめる)、「天意にはかなうが、人間の掟に背く行為」を選ぶかの選択に迷った。

人間の「意志」はしばしば間違いを選択する。「門」の宗助夫婦のケースをこれに当てはめれば、二人は当然、後者である。だが彼らは「意志」を確認する暇もなく、突発的な「嵐」に襲われたと言う説明がなされているだけである。

その意味では 2 つの区分は代助の頭脳で考え出されたに過ぎず、強いて言えば後者の「意志」のいたずらが宗助夫婦には当たりかけたと言うべきであろう。夫婦は世間の苦痛は恐れるが、今の自分たちの関係が間違っているとは思っていない。

一旦起こってしまった出来事は、どこまでも「継続中」(ガラス戸の中)で、時々表面に浮かび上がる。宗助も予測するように、同様の試練は再び宗助を襲うかもしれない。春が来てありがたいと言う御米に対して、「うん、しかしまた直冬になるよ」と答える宗助は、縁側で爪を切っている。

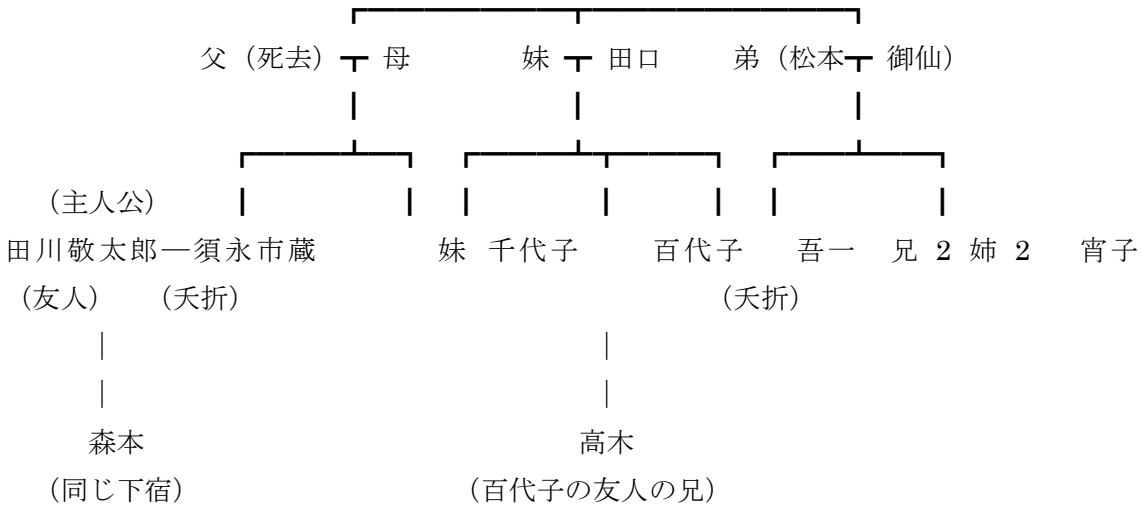
小説は冒頭の場面に戻って終わるのである。人生もこのようなものかと言う感を禁じ得ない。

「門」の題名は小宮豊隆によると、漱石が面倒くさくなって、森田草平に適当に考えてくれと依頼したものらしい。森田は小宮と相談し、机上の「ツアラトツトラ」をいい加減に開くと「門」と言う言葉があったのでそれに決めたと言う。できすぎた話だが、どんな題でもそれに合致したものを描いてみせると言う、
当時の漱石の自信が感じられる。

後期三部作
彼岸過迄

冒険好きの青年・田川敬太郎は、就職活動もそっちのけで友人・須永の叔父、実業家の田口の依頼である男を尾行したりしている。
しかし、田口にろくな報告をできなかった敬太郎は、男を訪ねて話をすることにする。果たして男と一緒にいた女は田口の長女・千代子であり、男は須永のもう一人の叔父・松本であったことを知る。千代子は須永が親密でありながら結婚に踏み切れずにいる相手だった。
以後、話は千代子と須永との立ちいかない恋愛と、その数奇な出自をめぐる物語に移行し、悩める須永の告白をもって、敬太郎の冒険は終わる。

関係図



ストーリー

「彼岸過迄」は六つの短編から成り立っています。「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」で、それらが連なって長編小説が完成するといった仕組みになっています。

「風呂の後」

前半の主人公田川敬太郎は大学を卒業しましたが、まだ職に就けていないでいます。同じ下宿に住む森本と風呂で出会い、面白い話を聞くのですが、その森本は突然満州に夜逃げをしてしまいます。

「停留所」

敬太郎は友人須永市蔵の叔父である田口要作を紹介して貰います。その田口から敬太郎は、ある男の探偵を命じられますが、結局はその男と若い女が一緒に食事をしたという以外、大した情報も得ることが出来ませんでした。

「報告」

田口に大した報告も出来なかった敬太郎ですが、田口は敬太郎に調査した男への紹介状を書いてくれます。男は松本恒三という綱が野もう一人の叔父で、高等遊民として暮らしていました。一緒にいた女は田口自身の娘、千代子だったのです。

「雨の降る日」

敬太郎は田口に言われたまま、松本に会いに行きますが、その日は雨の日だったので会ってくれませんでした。実は松本は雨の降る日、来客中に愛娘を突然亡くしてしまった経験があり、それ以後雨の降る日には人に合わないのだと、敬太郎は千代子の口からききます。

「須永の話」
　須永と.千代子は許嫁のような関係にあり、須永の母もその結婚を望んでいましたが、田口はあまり乗り気ではなく、須永自身も気が進まないでいました。しかし、高木という男の出現により、須永は強い嫉妬を感じます。須永の態度を見て、千代子は、自分を愛してもいないのに何故と須永に詰問するのです。
「松本の話」
　須永は親戚の中にあって、絶えず深い孤独を感じていました。それを心配した叔父の松本は須永の悩みを聞きます。松本に対して激高した須永に対して、松本は、須永が実の母の子供ではなく、小間使いの子だと、彼の出生の秘密を打ち明けたのです。

　「彼岸過迄」は明治４５年１月から連載が開始されたのですが、その前年の明治４４年、誰よりもかわいがっていた漱石の五女雛子が原因不明の病気で死んでしまいます。漱石の悲しみは相当なものだったと言われています。
　その時の総遺跡の心痛な思いは「彼岸過迄」の中の「雨の降る日」の章で見事に表現されているのです。作品のなかでは雛子は宵子という名前で登場しているのですが、漱石自身「雨の降る日」を執筆した後、「いい供養をした」と語ったと言われています。

　宵子の死は、「彼岸過迄」の中の「雨の降る日」の章で、敬太郎が松本に会いに行くが、松本が雨の降る日には、客と会おうともしないエピソードが語られます。
　松本には一三歳の女の子を筆頭に、五人の子どもがいたのですが、五番目の女の子が二歳になる宵子で、千代子自身も一番かわいがっていたのです。透き通るような肌と大きく黒い眸、宵子はまさに真珠のような女の子でした。
　ある時、千代子を囲んで家族が団欒していると、豆の中を一人の訪問者が紹介状を持って訪ねてきました。松本が相手をしている間に、その事件が起こったのです。
　千代子がご飯を挙げている時に、宵子の心臓が突然停止したのです。漱石はその後、通夜、葬式、骨拾いと、自分が実際に宵子を弔うように、淡々と描写していきます。
　その日以来、松本は雨の降る日はだれとも合わなくなります。おそらく宵子が死んだ日のことを思い出すからでしょう。

「行人」読書

長野家　　父--------母　　岡田－－－-兼
　　：
　　―――――――――――　　三沢　　女
　　重　　二　　一
　　郎　　郎　＝　直　　佐野-----貞

H

この作品は、大正元年１２月から筆を起こしたが、執筆は遅々として進まず、神経衰弱や胃潰瘍のため中断、ようやく、２年１１月続編の「塵労」を完成。

この作品は、前作「彼岸過迄」の「須永の話」を発展させている。

一郎と直の夫婦関係に、漱石が直面している問題を設定する。

近代的な知識人の懐疑と深い苦渋が捕らえられている。周囲のさまざまな人に囲まれて自己を偽り、孤立する主人公が調和を求めて苦悩の末、ついに周囲の虚像を自分も分け持っていることを悟り、自分の罪に気付くストリーを描いている。三部作には見られない優れた追求が示されている。

「門」について厳しい批判をした正宗白鳥は、「行人」については、「他人の心の暗さ醜さを傍観者的に描いているというのでなく、これらに現れているいろいろな疑惑は、作者自身の心に深く根を張っていたのではないか」と、肯定的に捉えている。

大学教授の長野一郎は妻であるお直の心がつかめないと苦労する。一郎はお直が実は弟の二郎を愛しているのではないかと疑い、和歌の浦への旅行中、一郎は二郎にお直の貞操を試すよう依頼する。理知的であるがゆえに妻の心が見えないと苦悩する一郎は、やがて同僚の H さんと旅に出る。空回りする一郎の自意識に近代人の他者の問題が凝縮される。「妾なんか丁度親の手で植え付けられた鉢植えのようなもの」というお直の言葉に、漱石の女性認識の新たな展開が感じられる。

あらすじ

妻・直の心がつかめず苦悩している大学教授の長野一郎は、家族旅行で訪れた和歌の浦で、弟の二郎に奇妙な相談を持ち掛ける。妻の直と宿で一泊し、貞操を試してくれと言うのだ。（兄）。

断るも、結果的に義姉と嵐の一夜を過ごすこととなった二郎は、東京へ戻ると何事もなかったことを報告するが、信じようとしない兄との仲は気まずくなり、やがて家を出ること

にする（帰ってから）。
精神の安定を失い、奇行がひどくなる一方の一郎に対して、二郎は兄の親友のＨさんに依頼して旅に連れ出してもらい、その原因を探ることにする（塵労）

「行人」　三十五、三十六より
兄・一郎から嫂との不倫を疑われる弟・二郎。その二郎と嫂がよりによって、嵐の夜、旅館の一室にふたりだけで向かい合う。交通は途絶え、電話線も切れ、そして停電の中、娼態を見せるがごとき嫂のふるまい。どうなる二郎？、新聞小説かとして、人気を十分に意識した漱石の、エンタテイメント性が炸裂した場面だ。

ストーリー
「友達」
　長野二郎はお手伝いのお貞の結婚相手を見るために、関西の旅行をします。そのついでに友人の三沢とある約束をしていたのですが、三沢は胃を悪くして入院していました。二郎は、三沢を見舞うために病院に行くうちに、患者である美しい女に心惹かれます。三沢は入院する前のその女に酒を強要したことがありました。三沢は退院する前に、精神を病んでいたある娘さんの話を二郎にします。
「兄」
　二郎の兄で学者の一郎が母と妻である直を伴って大阪にやってきます。四人は観光の為に暫く滞在したのですが、その折、一郎は二郎に対して、妻直の貞操を試して欲しいと依頼します。二郎はいったん拒否しますが、とうとう直と二人で旅行をする羽目に陥ります。日帰りのつもりが、台風のため二人は一緒に泊まることになったのですが、結局直の心は掴めず仕舞でした。二郎は直の貞操を疑う必要はないと報告し、くわしくは東京に還ってからと、一郎に約束します。
「帰ってから」
　東京に還ってからも、二郎は一郎に詳しい報告をしませんでした。一郎から強く求められましたが、二郎は彼の追求を避けるような態度をとりました。すると一郎は、お前は父と同じ軽薄な男で信用できないと激怒します。それ以後、家の居心地が悪くなった二郎はついに兄夫婦と両親が同居する実家を出て、下宿暮らしをすることを決意します。
「塵労」
　二郎が家を出た後、一郎の精神状態はますますひどくなるばかりでした。直も二郎の下宿を訪ねて、自分は立ち枯れになるかもしれないと訴えます。二郎は両親と相談し、一郎を親友Ｈに頼んで、強引に旅行に連れ出してもらうことにしました。Ｈは手紙で兄の苦悩を詳しく綴ってくれました。一郎は旅行中、自分は絶対だと主張し、このままだと死ぬか、気が狂うか、宗教に入るしかないと語ったのです。

読みどころ

様々な愛の形を描いたのが漱石で、その中でも「行人」は傑出した作品です。

「行人」とは通り過ぎるだけの人、あるいは旅人と言ってもいいでしょう。どれほど愛しあっても、人と人との関係は「行人」であって、相手の気持ちを本当に知ることなど誰にもできないといった、漱石独特の人間観が作品の底辺に流れているのだから、これほど寂しい作品はないでしょう。

まず「行人」の一人目の話が紹介されています。

語り手である長野二郎は、友人の三沢と会う約束をして、大阪に来たのですが、肝心の三沢は胃腸を悪くして入院していたのです。その病院で「あの女」に惹かれたのですが、実は三沢はその女と入院する前に偶然会って、一緒に酒を飲んだことがあったのです。

三沢はなぜ強引に女に酒を飲ませたのでしょうか？

「あの女」は胃を患っていたのですが、三沢に酒を飲まされた後胃病が悪化し、結局入院することになります。三沢も軽症ですが、「あの女」が入院しているのではないかという期待もあって、同じ病院に入院んします。ここにも人と人の淡い出会いがあったのです。

自分の身体なのに、其の身体の中がどのような状態なのか分からない、相手の身体がどのような状態化もわからない。そんな恐怖が漱石の中には絶えずあったのかもしれない。もしかすると、自分の身体の中に取り返しがつかない異変が起こっているかもしれないのです。そうとも知らずに、何事もなかったように日常生活を送っているわけで、考えてみれば、これほど恐ろしいことはありません。

自分が制御できないもの、得体のしれない恐ろしいものとして、漱石は「身体」を描きだしたのです。そして、其の身体に闘いを挑み、破れていく姿を描き出していきます。

実際、漱石は生涯胃病に悩まされたのですが、そういった体験を作品の中で見事結晶化させる文章力。やはり、漱石はすごいです。

「あの女」は売っ子芸者として、たとえどこか身体が悪くても決して休む様子もなく、着飾ってお座敷に出るようにしていました。おそらく売られた同然の身分でしたが、売上に貢献できるうちは大切に扱われていたようです。ところが、回復の見込みがないようなひどい胃病を患い、病室でもしばしば地を吐いていたようなので、さぞかし心細いだろうと三沢は思ったのです。

三沢は自分のせいで「あの女」の胃病がこれほどまでに悪化したわけですから、「あの女」のことが気になって仕方がありません。しかし、これだけはどうすることも出来ず、「あの女」を残して退院すると、もう二度と会うことも無いかも知れません。

まさに「あの女」は三沢にとって、「行人」だったのです。留まることも無く、目の前を通りすぎていくだけの人なのです。

三沢は退院んが決まった日、「あの女」に別れのあいさつをします。「あの女」はおそらく助からないだろうし、そうでなくとも二度と会う機会などないのです。「ご機嫌よう」と言った女の淋しい笑いを三沢は夢に見そうだというのですが、実は人生とはそういった繰

り返しではないでしょうか。
　この時期、漱石は死を凝視しながら執筆しています。その視点で人生を見詰めなおした時、「行人」＝通り過ぎるだけの人、といった捉え方を否応なくしたのではないか。
　漱石が「行人」という作品に、なぜこのようなエピソードを挿入したのか、実は長い間私にとっては謎だったのです。
　人は人と出会い、何らかの交流をした後に、再び分かれていきます。私たちは自分の身体の中も相手の身体の中もわからないまま触れ合っています。三沢も「あの女」の身体の状態がわかれば、あの時あれほど酒を飲ませることはなかっただろうし、「あの女」も無理に酒を煽るほど飲むことはなかったはずです。
　自分の進退ですらわからないまま私たちは生きているのですから、ましてや自分の心も相手の心ももっとわからないはずです。わからないまま、人と出会い、ある時は人生を共にし、そして、最後まで分からないまま別れていきます。たとえ、結婚して、最後まで離婚をしなくとも、死という別れを避けることはできません。
まさに人と人とは「行人」ではないでしょうか。
　私も様々な人生経験を積んで、今ようやく「行人」の深い意味が本の少しは理解できるような気がします。
　そして、三沢はもう一つ、「行人」の話を二郎に語ります。

　精神に異常をきたした娘さんが、三沢が外出するたびに、「早く帰って来てちょうだいね」と何度も繰り返すのです。その娘さんは嫁ぎ先で精神に異常をきたし、離縁されたのですが、それほど娘さんは淋しくて淋しくてたまらなかったので商。しかし、娘さんの心を誰も理解しようとしなかったのです。
　娘さんは家族の一員として受け入れられたに違いないのですが、彼女にとって嫁ぎ先の家族はやはり「行人」だったのです。
　娘さんがどれほど淋しい思いをしていたのか、誰も彼女の心を掴もうとはしませんでした。精神に異常をきたすほど深い孤独を胸の内に抱えて生きてきたのです。」だからこそ、三沢に対して、「孤独を訴える」ように、纏わりつくように、黒い眸で訴えかけ続けたので洲。「どうぞ助けてください」と訴えかけられたと、三沢は感じ取っています。
　人と人とのかかわりあいの中で、表面的なそれで満足できる人は逆に幸せ化も知れません。しかし、人と深く交わろうとするとき、私たちはどうしてもお互いに分かり合えないという己の孤独と真正面から向き合わなくてはいけなくなります。
　漱石はそうした人間の根源的な孤独を言葉で掬い上げようとするのです。
　三沢はその娘さんの孤独を次第に引き受けたいと思うようになったのでしょう。しかし、、娘さんは病院に入れられ、誰に理解されることなく、孤独な魂を抱え込んだまま独りぼっちで死んでいったのです。

「行人」として最後に登場するのが、二郎の兄の一郎です。この一郎は強烈な個性の持ち主、得意な世界観を持った人物として造形されています。私自身は一郎に漱石自身が投影されているように思えるのですが。

一郎は学者でありｂ、頭脳明晰ですが、まじめすぎて頑固で、何事も自分の脳髄を使ってぎりぎりまで考え抜くタイプです。対極にあるのが二郎で、二郎とその父で、実利的であり、世渡り上手ですが、一郎に言わせると「軽薄な人間」ということになります。

一郎はには直という妻がいます。お互い相思相愛で表面的には何の問題も起こっていません。ところが、一郎は直の自分への愛情が本当かどうかわからず、それゆえ、死ぬほど苦しみ抜きます。たとえ妻であっても人の心がつかみにくいことを知っている一郎は、直の魂をつかみ取りたいと狂惜しく思うのです。

女の容貌や肉体に満足している人間ならば、これほど苦しむことはありません。実際直と夫婦生活を営んでいるし、直が浮気をしているという事実はありません。それでも不安で仕方ないのは、直のスピリット（魂）をつかんでいないからだと、一郎は思ったのです。

一郎は二郎に向かって、「直は御前に惚れているんじゃないか」と言い、妻の貞操を試してくれと頼みます。

結局、直の貞操はわからずじまいで、二郎はそれをさほど深刻なものと受け取らず、しばらくほったらかしにしておいたのですが、二郎のそうした言動がやがて一郎の激怒を招きます。ついにいたたまれなくなった二郎は家を出る決意をし、一郎に別れの挨拶を言いに部屋に入ったところ、一郎から思わぬ話を聞かされます。

二郎はこの話を聞いて愕然とします。それどころか一郎の精神状態さえ疑ったのです。今、一郎は弟の二郎と妻との関係を疑っているのですが、パラオとフランチェスカの夫の弟、まさに一郎と二郎の関係と同じです。そして、パオロとフランチェスカは兄の眼を盗んで愛し合い、それを知った兄が二人を殺してしまうのです。

おそらく兄はこの後自分の妻との関係を追求するだろうと、治郎が「厭な疑念」を持ったのも、無理からぬことでした。

世間は不倫を働いたパオロとフランチェスカの名前だけを覚えていて、被害者であるパオロノ兄の名前は憶えていないのです。一郎は二郎にそのわけが分かるかと問いかけたのです。

一郎の論はこうです。

自然が醸し出すものと、人間が作り出した道徳とを対比させ、最後には自然が醸し出したものが賛美されるというのです。

さしずめ恋愛は自然の感情であり、道徳は人間の作ったものです。

人を好きになるというのは自然の行為にほかならず、それ自体は善でも悪でもありませ

ん。たまたま愛してしまった人が兄の妻であったということで、人は逸誰を好きになるかわからないのです。
　フランチェスカがパオロを愛してしまったということは自然の感情であり、結果、フランチェスカが夫を愛せなくなってしまったということも自然の感情で、本来どうしようもないことなのです。
　ところが、世間はそれを不義だと責め立てます。なぜなら、二人は道徳を犯してしまったからなのです。道徳とは社会全体を円滑にするために便宜的に人間が作ったもので、人びとは当然がその時は道徳に加勢するものです。なぜなら、不義を認めたら、家族制度が崩壊する可能性があるから。
　たとえば、ワイドショーなどで芸能人の不義を暴き立てるときも、「不倫」＝「悪」と決めつけ、そこに何の板外の余地も挟み込もうとしないのですが、私にはそうした態度自体が思考停止状態のように思えます。
　フランチェスカがパオロを愛して再待ったということは、夫を愛していないということです。それが自然の感情なのに、愛していない夫を生涯愛している振りをして暮らせというのでしょうか。それなのに道徳は人に反した行為を強制させようとするのです。「それから」の代助のように、まさに自然に反したから、自然に罰せられたのだという結末を迎える可能性だってあるのです。
　夫は夫で、パオロとフランチェスカを不義だと決めつけ、二人を殺してしまったのですが、それは妻を自分の所有物だと決め込んでしまっているからです。「俺の女だ」「俺のものだ」「俺の女に手を出すな」と、よくこうしたセリフを耳にすることがありますが、相手を自分のものだと決めつけた時、その人の心が離れてしまったとしても、きっと気が付かないことでしょう。
　フランチェスカのおっとにとって、妻は自己の所有物だから、不義を働いた理由で殺すことが出来たのです。そして、せけんはその時は夫を加勢し、二人を不義だと責め立てます。
　ところが、時が経つにつれ、たとえ殺されようとも愛を貫いた二人の在り方がキラキラと輝き始め、パオロとフランチェスカを賛美する声が永遠となったのです。二人は愛という自然の感情に従ったのですから、道徳を盾に二人を責め立てたフランチェスカの夫よりも賛美の声が大きくなるのには、ある意味では当然と言えるかもしれません。
　そして、一郎は結婚という制度では人の心を縛れないことを知っているから、逆に愛する妻の魂を掴みたいと、狂おしい迄願ったのです。

Hの手紙から、一郎の精神世界を読み取っていく。
（塵労）
　ここにきて一郎の苦悩が明かされてくるのですが、一郎が苦しいのは何も妻の心が掴めないだけでなくて、その根源のところに、自分の存在すること自体に漠然とした不安があ

るのです。
なんのために生きているのか何をしなければならないのか、生きることの目的は何か、自分とは何なのか、それをしっかりと掴まないかぎり、一郎は不安で仕方ないのです。
　その延長線上に、愛する人のスピリットを掴みたいという願望があるのです。しかし、二郎にも直にもそうした一郎の精神世界は理解できません。だから、一郎は孤独で仕方ないのです。この孤独な須永の「淋しいです。世の中にたった一人立っているような気がします」（彼岸過迄）という言葉とつながっている。
（塵労）
　一郎の言葉は非常に迫力があります。おそらく一郎の「恐ろしさ」は読者のほとんどが理解できないだろう。なぜなら、たいていの人がわかろうとするのは、一郎の言葉を借りるならば「頭の恐ろしさ」であり、「心臓の恐ろしさ」ではないからです。一郎が抱えている「恐ろしさ」は頭では理解することは不可能であり、まさに生きた心臓で体感するものなのなのでしょう。
（塵労）
「死ぬか、気が違う化、それでなければ宗教に入るか」が一郎の言葉ですが、一郎は紙を否定し、自分の頭で全てを克服しようとしています。だから、このままいくと錯乱してしまうしかないというのです。
　一郎は死ぬか気が違う化のギリギリのところでとどまっているのですが、これは晩年の漱石の苦しみの告白でもあるのです。
「吾輩は猫である」「坊っちゃん」などの勧善懲悪の世界とは全く別個の世界が、ここで開示されたのです。
一郎は紙を否定した限り、「神は自己だ」と宣言するしかありません。
一郎は「神は自己だ」といい、一方で「僕は絶対だ」とも言っているので、「神」を「絶対」と同義語とかんがえてもいい。
　自分を無にすることで、万物すべてが自分だから、自分が絶対だと言うのです。そこに咲いている百合の花も、さらさらと音を立てて流れる小川も自分だ。だから、自分が神だと主張します。
　そうした境地にあってあらゆるものに触れるとき、その万物は自分であるから、それが即ち相対なのです。
　この思いあがった心境というよりもむしろその逆で、自然や、この地上に存在するあらゆるものと一体化したいという、一郎の強い願望だと言えます。その境地に達すると、妻が自分を愛しているかどうかなど、世俗的なことに思い悩む必要もなくなります。
宗教を否定した一郎にとって、これしか救いはなかったのでしょう。

　日本人はもともと出家をしたり、隠遁生活を送ったり、旅をすることによって、自己を棄て、自然と一体化しようとしました。芭蕉はそうした境地を「風流」となづけています。

所が、漱石のそれは、西行や兼好や芭蕉の境地とは一線を画しています。彼らはもともと自我という概念がなかったのです。自我はあくまで近代が生み出したものなのです。
自我がないから自然と一体化することが出来たのです。
　それに対して、漱石は徹底的に自我を追求します。一郎も「自己」を何処までも追及しようとしています。自己をギリギリまで追求することによって、逆に万物と一体化する、それが一郎の世界観であり、それ故一郎はギリギリまで自分の頭で考えて考えて、考え抜くしかありません。
これは漱石の理想的境地といわれる「即天去私」につながるものではないか。
そして、Hはその手紙で次のように締めくくっている。
（塵労）

「こころ」読書

　大正３年（1914 年）４月から８月　朝日新聞　110 回連載
　９月には半自主出版の形で刊行されたが、漱石が序文を書き、表紙のデザインも自分でしている。
　語り手の「私」は地方出身の青年で、明治が終わる少し前に大学を卒業。高等学校時代に鎌倉の海水浴場で一人の紳士と知り合い、それ以後「先生」と呼んで私淑している。先生は定職を持たず、勇んで生活しているようだ。「私」は先生の家を訪問するようになるが、先生の内面と過去は謎に満ちている。

　漱石が年来抱いていた「自分が自分でありながら、自分の主人公ではない」という不安が、この作品での主題である。自分本位を保とうとしても、いざというときに自分が自分でないものによって圧倒されてしまい、一層苦しいところに追い込まれてしまう。「先生」は「多くの善人がいざという場合に、突然に悪人となるのだから油断ならない」と言っているが、信頼している叔父に遺産の問題で裏切られる。自分だけは大丈夫と思っていたが、恋愛の問題では嫉妬と我に支配されてしまう自分を知る。他人を呪い嫌っていた自分が、今度は自分自身を呪い嫌うことになってしまう。その苦しみに悩みぬいた末、今度は自分自身の犠牲者として殉じてしまう。
　愛と不信とを同時にもつという矛盾に苦しむ知識人の姿を的確にとらえているこの作品は、若い読者に深い感銘を与えた。

　単行本化に際し、連載時の全１１０章を上・中・下に３分割し、それぞれ「先生と私」「両

親と私」「先生と遺書」に再構成した。上・中の語り手が青年の「私」。下は「先生」が自らを語り、かつて友人から恋人を奪ったこと、そしてその罪悪感に長く苛まれていることが明らかにされる。明治の「青年期」を終えた日本人の、倫理感とエゴを鋭く追及した内容であり、漱石文学の到達点といわれる傑作である。

「子悪」と「礼」　荀子
モチーフ：　光と影　　――＞　　内面化
　　（先生と私）　　（遺書）
明治 43 年　夏から 2 年間　大正元年 9 月（過去完了）
明治天皇の崩御

（先生と私）
第一の出会い：明治 43 年夏、鎌倉の海
第二の出会い：先生の秘密、東京、雑司が谷の墓地　先生の友人Ｋの墓がある
　　ある晩、信用しない、信用できない、近寄ってはいけない
　　先生の過去判明：卒論準備―＞郊外散歩―＞つつじ
　　財産整理問題から、善人―＞悪人になる、人間不信
　　「人、親戚に欺かれたのです。死ぬまで忘れない、復習する」
　　明治 45 年秋、卒業、故郷に帰る、晩餐会、また 9 月に暗い表に
　　（両親と私）天皇崩御、東京を想像、先生からの遺書が届く
　　（先生と遺書）暗い人生――＞参考にしてください。
　　裕福な学生、
Ｋの告白、Ｋへの罵倒（精神的に向上心のないものは馬鹿だ）、策略、
覚悟・影
Ｋの自殺
妻への思い
明治の終わり
自殺

こころを読む
　学生の「私」は、鎌倉の由比ガ浜で出会った男に「先生」と呼びかけたことで、親しく交流するようになる。その交流を通じて、人生の教訓を得たいと思ったからだ。やがて私は先生夫妻の人柄に惹かれながらも、その謎めいた過去を知りたいと願うようになる。先生は時が来たときに秘密を明かすことを約束した。大学を卒業した「私」は、病床の父の側にいるべく故郷で一夏を過ごすが、思いがけず「先生」からの長い手紙が届く。危篤の父を故郷に残して東京行きの汽車に飛び乗った。そこには学生時代の「先生」が、現在の

妻である女性を巡って、親友との間に巻き起こした恋愛事件の顛末が告白されていた。「自由と独立と己とに充ちた現代」に生きる近代人の悲劇を描いた漱石の代表作。

こころ　　中　　両親と私　十六、十七、十八より
実家へ戻り、病気の父親の枕元に座している「私」のもとへ先生から手紙が届く。罪を告白する例の分厚い手紙である。しかし木徳を迎えつつある父親の傍らで手紙をじっくり読む暇はない。だが、期になって、ちらりと開いて目に入った頁に先生の自死の予告。八となった私は、危篤の父親を見捨て、東京行きの汽車に飛び乗る。そうして車中で先生の告白を読むのだ。この場面のサスペンスの盛り上げ方は、「エンタテイメント作家」そうせきの面目躍如というところだ。

ストーリー
「先生と私」
　鎌倉の海岸で「先生」と知り合った語り手「私」は、先生のお宅をしばしば訪問するようになりました。先生は毎月一回、必ず一人で友人の墓をお参りしていました。先生と友人との間に何があったのか先生は語ろうとしませんでした。先生は「恋は罪悪ですよ」と言い、其の時期が来たら、先生の暗い過去をすべて話してくれると、私に約束します。
「両親と私」
　「私」は大学を卒業した後、いったん故郷に帰ります。就職のために東京に戻ろうとするのですが、病気の父が危篤状態に陥ります。母が私の就職がまだ決まっていないことを心配し、先生に世話をしてもらうように私に勧めます。私は先生に手紙を書くのですが、一週間たっても返事は来ませんでした。
　いよいよ父の最期の瞬間が来たと覚悟したとき、先生から分厚い手紙が届きます。私はその手紙を手にしながら、東京行きの汽車に飛び乗りました。
「先生と遺書」
　両親を亡くした「先生」は信頼していた叔父に財産を横領され、人間不信に陥っていました。その後東京に戻り、新しい下宿先を探します。その下宿には軍人の.未亡人と一人の娘がいたのですが、先生はそのお嬢さんにだんだん心が惹かれていきます。
　一方、先生の親友Kは養親を欺き、実家から勘当されます。Kの事を心配した先生は彼を自分の下宿屋に連れて行きます。Kは親切な奥さんとお嬢さんのおかげで次第に明るくなっていったのですが、彼がお嬢さんと親密になるにつれ、先生は嫉妬に苦しむことになります。ある時、Kの口からお嬢さんに対する切ない感情を打ち明けられ、先生は「先を越されたな」と思います。先生はお嬢さんへの慕情に苦しむKに向かって、「精神的に向上

心のないものは、馬鹿だ」と、かつてＫ自身が吐いた言葉を投げつけ、恋のゆくてを遮ろうとします。
　動揺した先生はＫを出し抜いて、お嬢さんとの結婚を決めてしまったのです。そのことを知ったＫは何も言わずに、自殺してしまいます。その後、先生は何事もなかったようにお嬢さんと結婚するのですが、その結婚生活は索漠としたものでした。結局、先生は乃木大将殉死の知らせを聞いて、明治の精神に殉死するとして、自殺していったのです。

作品の面白さ
　私はその人を「先生」と呼んだのですが、先生は親の財産で働く必要のない生活を送っている。いわゆる高等遊民であって、教師という職業に就いているわけではありません。
私は先生に惹かれ、その先生から何か人生の大切なものを学ぼうと思っているから、先生と呼んだのです。
　若くして両親を亡くし、一人になった先生は叔父を頼り、全財産の管理を託して東京で学生生活を送っていました。休みに帰郷すると、叔父は自分の娘と結婚するように勧めだしたのです。叔父は既に財産をごまかして、そのために策略で娘を押し付けようとしていたのです。
そういった経験から、最初は下宿屋の奥さんも財産目当てに自分の娘を押し付けようとしているのではないかと、警戒していたのです。「先生と遺書」で、先生は、こう語って行きます。

　しかし、その一方で次第にお嬢さんに惹かれる気持ちが強くなっていくのはどうしようもないことでした。

　先生はお嬢さんに対して、「信仰に近い愛」だと告白しているのですが、まだ二人の関係は淡いもので、お互いの気持ちを確かめることも無かったのです。
　それがＫの出現によって、二人の関係が大きく変化します。
Ｋは自分が信じる道の為にあらゆる犠牲を厭わない、強い意志をもった人物でした。
　だから、Ｋを医者にしようとしていた義父母を欺いて、仕送りを受取り続けていました。そのことが義父母に知られて、仕送りを止められ、しかも、実の両親からも勘当を言い渡されます。まさにＫは天涯孤独の境遇となってしまったのです。そういったＫを見るに見かねて、先生はＫを自分の下宿に連れてきたのです。
　先生の下宿に住み始めたＫは最初、下宿屋の奥さんやお嬢さんにぶっきらぼうだったのですが、次第に二人と打ち解け始めます。それは先生が本来臨んだことだったのですが、Ｋとお嬢さんが親しげにするのを見るにつれ、先生の心が徐々に穏やかでは亡くなります。

ある時、先生がいつもより遅く下宿に帰ったとき、Kの部屋からお嬢さんの声が聞こえてきたのです。

先生は叔父に財産を横領されたこともあり、お嬢さんに若干の警戒心を抱いていたため、それと特に焦ってお嬢さんとの深い関係を結ぶ必要がなかったため、今まで、特にお嬢さんに積極的に出ることはなかったのですが、Kが出現することによって、先生のお嬢さんに対する見方が変わったのです。

この段階ではKの気持ちも、お嬢さんの気持ちもまったくわかりません。しかし、この些細な出来事から、Kとお嬢さんとの様子に無関心ではいられなくなるのです。

そして、突然のKの告白です。

「精進」という言葉を普段から使い、己を厳しく律して生きてきたKにとって、自分が人を好きになるなんて思ってもみなかったことなのです。実は「精進」という言葉には禁欲の意味も含まれていたのです。

かつてKは「向上心のないものは馬鹿だ」と先生に言い切りました。それなのにお嬢さんを好きになってしまったのです。お嬢さんのことが頭から離れることが出来ません。まさに向上心のない馬鹿は自分で、そのことで一番苦しんでいるのはK自身だったのです。

もちろんこの時点でKはお嬢さんに自分の気持ちを打ち分けようとか、前に進もうと思っていたわけではありません。苦しくて苦しくて、もっとも信用している先生に告白したい衝動に駆られただけなのです。

しかし、先生は「先を越されたな」と思ったのです。

先生はKの恋の行く手を遮ろうとするように、Kに無言の圧力をかけたのです。

ここで注視しなければならないのは、K自身は自分の気持ちをどう整理するのかで頭がいっぱいで、先生が密かにお嬢さんを愛していたなどおもってもいなかったことです。そして、先生もKに対して自分の本心を打ち明けることはしませんでした。

先生はKと表面上親友を装っていながら、心では敵対していたし、Kは先生がどんな気持ちでいるのか、想像さえしていませんでした。逆に言うと、Kはそれほど先生を信用していたのかもしれません。

やがて先生は仮病を使って、奥さんと二人きりになる機会を作りました。

まさに普通の人間が突然悪い人間に変わったのです。先生がかつて「私」に「突然悪人になるのだから油断してはいけない」といったのは、財産を横領した叔父のこともあり、そして、自分自身のことでもあったのです。

何も知らない奥さんがお嬢さんの結婚のことをKに告げ、「あなたも喜んでください」と

いったとき、Ｋは「おめでとうございます」と言い、さらに「何かお祝いを上げたいが、私には金がないから上げることが出来ません。」と付け加えたのです。
そしてＫは自殺します。

ここがポイント
先生はなぜ自殺したのでしょうか？
若いころ、Ｋを裏切ってお嬢さんと結婚し、そのためＫが自殺してしまったので、良心の呵責に耐えかねて自殺したと思われがちです。
本当にそうでしょうか？
作品の中には次のように書かれています

ここで告白されているのは、Ｋを裏切った良心の呵責ではありません。先生は、もし殉死するなら、明治天皇にではなく、明治の精神に殉死すると告げているのです。
では、明治の精神とは何か？
先生は遺書の中に次のように続けています。

乃木希典大将は若い時西南戦争で隊旗を取られ、申し訳なく切腹しようとしました。
しかし、それならその命を天皇の為に仕えと、人に諭され、死のう死のうと思いながら三五年間生き続け、天皇の葬式の夜、殉死したのです。
　先生は乃木大将の三五年の孤独な人生と、自分のそれとを重ね、明治も終わり、乃木大将も殉死したのだからと、自殺を決心したというのです。
　では、Ｋの自殺以後の先生の人生はどのようなものだったのでしょうか？。
　まずはＫが何故自殺したのかを考えていきましょう。
　もちろん信頼している友の裏切り、失恋の痛手、それも十分自殺の動機にはなりますが、果たしてそれだけでしょうか？
まずＫの遺書を読んでみましょう。

Ｋは何一つ語らず、死んでいったのです。
いや何一つ語れなかったのでしょう。それは、お嬢さんの名前だけ遺書にないことでもわかります。自殺の理由としてＫが書いているのは、「自分は薄志弱行で到底先の望みがないから、自殺する」という言葉だけです。
先生には遺書の最後の言葉が引っかかりました。
「もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろう」
　先生は最後の言葉を読んで、Ｋはきっと寂しかったのだろう、と思ったのです。

お嬢さんとの失恋、先生の裏切り、そのどれをとってもKには耐えきれないほど苦しいことだったのに違いありません。
しかし、Kは自分に厳しい生き方をしてきたのです。信じる道のためにあらゆる執着を断ち切らなければならない。それなのにお嬢さんを好きになってしまったのです。人は自分の気持ちをコントロールすることなどできません。それは仕方のないことだったのでした。
そこでKは立った一人信頼している先生に救いを求めたのです。
ところが、先生は「向上心のないものは馬鹿だ」という、かつてK自身の言葉を投げ返しました。Kはそれに対して弁解はできません。馬鹿なのは自分の方なのです。
その時、Kは言葉にならないほどの寂しさを感じていたはずです。
Kは自分自身に厳しく、それと同時に他人にも厳しかったのです。それは自分を孤独に追いやることにほかなりませんでした。Kは故郷を棄て、家族を棄て、養父母まで棄てました。それでも精進と言って、歯を食いしばって生きてきたのです。
お嬢さんの結婚話を奥さんから聞かされた時、Kはそれが全く予期していないことだっただけに、心にぽっかり穴が開いたような感じがしたのです。そして、その穴はとても埋めようのないものでした。
Kは、相談相手の先生が密かにお嬢さんを愛していたなんて、夢にも思っていませんでした。隣同士の部屋で暮らしながら、相手の心を全く理解していなかったのです。そして、この世で一番愛していた人の心もわかっていなかった。
その時、Kはこの世でたった一人ぼっちだと自覚したのではないでしょうか。一度愛を知ったKは、もはや元の孤独を耐え抜く自信を無くしてしまったのです。
だから、遺書の最後に「もっと早くしぬべきだのに何故今までいきていたのだろう」と書き残したのです。遺書のほとんどが本音を隠した事務的な内容であったのですが、この最後のとこだけがKの本心だったのでしょう。
それは「彼岸過迄」の須永の「淋しいです。世の中にたった一人立っているような気がします」という信条につながるものなのです。
だから、Kは壁一枚隔てて眠っている先生の隣の部屋で、何も言わずに一人で死んでいったのです。

ではなぜ先生は自殺したのでしょうか？
遺書を読んだ先生は「私は私にとってどんなつらい文句がその中に書き列ねてあるだろうかと予想したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかしれないという恐怖があったのです。私は一寸目を通しただけで、まず助かったと思いました」とあります。まずKのことではなく、自分の立場を思いやったのです。

ここでは両親の呵責など、全く語られません。あるのは、自己保身の気持ちだけです。そして、Ｋがお嬢さんを好きだったことを誰にも打ち明けず、何食わぬ顔でお嬢さんと結婚したのです。その後、奥さん、お嬢さんとの三人の生活が始まるのですが、先生はＫの思い出となる過去を封印しなければならなくなりました。愛しているお嬢さんにも自分の本当の気持ちを隠し党さなければならないのです。
　やがて奥さんが死に、先生はお嬢さんと二人だけの暮らしを始めます。その時、徐々にＫが先生の胸の中で蘇ってきたのです。

先生はいつの間にかＫの生きてきた人生を辿っていたのです。「私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中に立った一人で住んでいるような気のしたこともよくありました」
まさに先生はＫの孤独を引き受けてしまっていたのです。

先生は、寂しくて寂しくて、この世で立った一人生きてきました。
死にたい死にたいと思いながらも、自分が死んだ後の奥さんのことを思うと、死ぬに死ねなかったのです。
その時、先生は、「もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」というＫの言葉にいつの間にか支配されていたのです。
そんな時、乃木大将の報せを聞いた先生は、「乃木さんはこの３５年の間、死のう死のうと思って、死ぬ機会を待っていたらしいのです。私はそういう人にとって、生きていた３５年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました」と、乃木大将の人生と自分のそれとを重ねたのです。
そして、「明治の精神」に殉死しようと、自殺を決意したのです。